

座談会2 : 金融ビジネスから見た地域の持続可能性

武田, 恵介
九州労働金庫

紺屋, 美里
九州労働金庫

坂本, 誠
九州労働金庫

鄭, 有景
九州大学持続可能な社会のための決断科学センター

他

<https://doi.org/10.15017/1910478>

出版情報 : 決断科学. 3, pp.135-156, 2017-03-23. 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター
バージョン :
権利関係 :

金融ビジネスから見た地域の持続可能性

武田恵介 紺屋美里 坂本誠 鄭有景 花松泰倫

司会

オファサーバー

決断科学プログラム統治モジュールでは、その活動開始当初から、九州ろうきん（九州労働金庫）職員を産学連携研究員という形でお招きし、ともに実習、セミナーを行ってきました。この産学連携研究事業は、統治モジュールが目指す持続可能な地域社会の構築を考えるにあたって、大学などの研究機関や学術的知見だけでなく、民間企業やビジネスの視点が不可欠であるという考えに基づいて行っています。これまでの三年間のなかで、産学連携研究員として三名のろうきん職員の方に統治モジュール活動にご参加いただきました。今回はこの三年間の参加活動を改めて振り返りながら、金融ビジネスの視点から見た地域の持続可能性、また決断のあり方などについて議論を行いました。大学に所属する教員や学生からはなかなか出てこない、金融の世界ならではの地域への眼差しと関与のあり方を感じ取れる内容になっています。本座談会は、第一期連携研究員の武田恵介さん、第二期の紺屋美里さん、第三期の坂本誠さんにご参加いただき、統治モジュール専任教員の鄭有景先生の司会で行いました。

鄭(司会) 今日では座談会ということで、武田さんほか、決断科学の統治モジュールに関わって頂いている九州ろうきんの皆さんにご出席いただいています。決断科学とのかかわりも含めて、皆さんの立場からいろいろなことを気楽に話し合える場になりたいと思います。

早速ですが、まず、九州ろうきんという金融機関について概要などを紹介いただけたらと思います。

九州ろうきんとはなにか：一般の金融機関との違い

坂本 当庫が設立されたのは戦後の一九五〇年代ですが、その時期はまだ銀行が労働者個人にはお金を貸してくれませんでした。お金を借りるところがなかったり、あっても金利が高くて、借りることにより生活が悪くなるという背景がありました。そういう状況なので、自分たちでお金を出し合って、それを必要な人に融資して、自分たちの中でお金を回して成り立たせようという労働者自主福祉運動からでき上がった金融機関がろうきんです。



坂本誠 さかもと まこと

九州労働金庫天草支店、人事部、熊本支店などを経て、2016年10月より第3期決断科学センター連携研究員。

そういった自主福祉運動から生まれた金融機関で、自分たちで集めたお金を自分たちで融通するということなので、私たちは、金融の中でもより深い福祉金融というものを実践しています。福祉金融を実践している金融機関なので、「福祉金融機関です」と名乗ることもあります。

鄭 出資した労働者間で助け合って、支え合うような金融機関ですよ。一般の株式会社銀行とどう違うのかがあいまいでしたが、説明していただいて、九州ろうきんの精神や理念がよく理解できたと思います。

九州ろうきんが決断科学プログラムに関わるワケ

鄭 さて最近、地域にある企業、金融機関を含めて、産学連携の動きがあります。韓国でも同様の動きがありますが、九州ろうきんが大学と関わり始めた理由、とくに、決断科学プログラムとの産学連携を考えるようになったきっかけを教えてください。

坂本 今、日本は人口減少がどんどん進んでいて、生産年齢人口と呼ばれる、いわゆる労働者も減っています。もつと言えば、労働組合が私たちのコアなお客様ですが、その組織率、つまり労働組合に加入する人の率も減っています。一方、外に目を向けると、金融競争の激化とあって、他金融機関との競争が激しくなっています。今の私たちのビジネスモデルで一〇年後や二〇年後を考えるときに、やっていけるのかという正直疑問で、また別のビジネスモデルが必要ではないかと考えています。

鄭 ろうきんも新たな変革が求められているのですね。

坂本 一方で、労働者自主福祉運動の話に戻ると、従来の労働者自主福祉運動は組織内での活動が中心だった

のですが、それだけだと地域との共生が図れないし、横のネットワーク、つながりをつくらないといけないということになって、労働者自主福祉運動がどんどん外の地域などに向けた取り組みをしていくようになってきました。当庫もそういう運動から出てきた金融機関なので、自然と地域福祉に目を向けるようになりました。ただ、ノウハウが無いのでなかなかうまくいきません。

決断科学プログラムは、統治モジュールを中心に地域づくりなどを研究分野とされているので、そういった学術的な部分で協力いただいて、私たちが金融という面から何かお返しできるのではないかとということで、今回こうやって私たちが派遣されて、連携して研究しています。

鄭 大学そのものも、狭い意味での学術研究だけでなく、もつと地域や社会に貢献することが求められている中で、同じところを目指して、ろうきんと九大が連携しているのではないかと思います。



武田恵介 たけだ けいすけ

九州労働金庫宮崎支店、総合企画部などを経て、2014年10月から2016年9月まで第1期決断科学センター連携研究員。
現在は総合企画部経営企画課所属。

産学連携研究員としてのかかり

鄭 時期が多少ずれますが、皆さんは決断科学センターの産学連携研究員という立場で統治モジュールの活動に加わって頂いています。皆さんがそれぞれこの産学連携に関わった背景やきっかけは何だったのでしょうか？

武田 そもそも産学連携の取り組みができる前に、決断科学プログラム副センター長の出水先生が、二〇〇四

年から当庫の非常勤理事をされていたという経緯があります。基本的に当庫の理事は、労働組合とかかわりのある方が多いのですが、その中で唯一の大学関係者で教授ということもありまして、これまでに、さまざまな意見をいただきました。そして、労働金庫の将来についていろいろと考えていく上で、学術的な知見を活用させていただき、ビジネスに展開できないかと思い、出水先生に産学連携の取り組みをお願いしたところです。

その後、出水先生から、新たなビジネスモデルを構築するためには、組織の日常業務から生まれにくい発想や観点が重要だとか指摘いただいて、当庫職員を大学に派遣するという新たな試み（産学連携）がスタートしました。そして、私は、その一期生として二〇一四年度から参加しました。

鄭 小さなつながりから広がったわけですね。

武田 出水先生との縁が大きかったですね。

鄭 紺屋さんはいかがですか？

紺屋 一つは、地域の中で育ったのが大きかったかも知れません。田舎育ちで、高卒で入庫し、二店舗目は離

島勤務だったんです。産学連携の二期生の選考にあたって開催された意見交換会で、「地域づくり」について他の方々とは少し違う視点で意見を出したということが、二期生として参加させていただききっかけになったのかなと思います。

武田 あと一つは、一〇年後、二〇年後の新しい時代の担い手として、連携の研究員は、若い職員が中心となるべきだと考えています。紺屋は特に、高校を卒業して社会人になったという立場ではすごく大変かもしれませ

んが、大学を経験していない職員が実際に九州大学の連携研究員になることで、さらに刺激を受け、いろいろなことを感じるのではないかという狙いの選考でもありました。

鄭 坂本さんは、まだ来られたばかりでこれから本格的な活動ということになりますが、いかがですか？

坂本 私は、ずっと現場というか、金融機関の支店で、先ほど話したような従来のビジネスモデルのもとで仕事をしてきました。その仕事にもやりがいを感じていましたが、一方で、労働者自主福祉運動をもう少し広げるような別の取り組みが、私たちの企業でできないかということを考えていました。武田さんや紺屋さんが産学連携において新たなビジネスモデルの展開を模索しているのを知って、そういうところも行きたい一つではないかと考えて、こちらへの参加を決断しました。

統治モジュールの活動のなかで学んだこと

鄭 決断科学プログラムが始まってちょうど三年が立



紺屋美里 こんや みさと

九州労働金庫鹿児島南、(奄美)大島支店、総合企画部を経て、2015年10月より第2期決断科学センター連携研究員。

ちましたが、一期生として参加された武田さんが、当時すごく緊張されていた姿を覚えています(笑)。問題解決セミナーもそうですし、実習でいろいろな地域を一緒に回った経験を振り返って、終わった今の感想をお聞かせください。

武田 まず、私は一期生ということで、何もわからない状況の中・・・(笑)。

鄭 私たちも何もわかってなくて(笑)。

武田 実は、何のルールも引かれてない状況の中で、決断科学に参加することになり、統治モジュールって何をやるんだろうというところから始まりました(笑)。大学時代は経済学部でしたので、まさにこの年齢になって違う分野を学ぶとは思っていませんでした。全く自分の知識が不足していて、最初、ついていけないというか、いろいろな学ばないといけないことがありました。

統治モジュールのセミナーに参加したときに、感銘を受けたのが、統治モジュールは地域のことを実践的に研究するのですが、大学院生も専攻が全く違う中、自分たちの知見を持ち寄って地域のことを考えるところがすごい。



鄭有景 ちゃん ゆぎよん

2014年より統治モジュール助教
専門：政治社会学

いなど。そこで私もいろいろ考えて、金融機関としてどういうことが考えられるかを常に意識しながら取り組んでいました。

鄭 確かに、学生も教員も専門が違うので、いろいろな視点で地域を捉える議論ができますよね。

武田 もう一つ強く感じたのは、実習で現場に行くと地域の方々と話して、抱えている課題などを聞き取ることで、いろいろなヒントを得たことです。二〇一四年の「まち・ひと・しごと創生」の関係で、ちょうど私が決

断科学に入ったときに人口減少という言葉が注目され始めたため、そのようなタイミングで、統治モジュールで地域の勉強をさせて頂いたのは、本当に貴重だったと思います。

鄭 地方消滅とか、そういう話がありましたね。

武田 そうですね。私の中で、最初は、地域だったら空き家住宅ローンだよねとか、移住だったら移住促進のローンだよねというふうにずっと頭の中で考えていました。でも、いざ持ち帰って、「どうですか」と聞いたときには、ほかの金融機関は既に商品化している状況でした。そういうことを考えると、ほかの金融機関はスピードの速いこと速いこと(笑)。当庫を見つめ直すと、そういう視点がどうしても足りないというか、シンクタンクもなく、組織の中でしか見てこなかったの、外に出て新たに感じることも多く、それを今後も意識して、外部に目を向けながら、当庫のビジネスモデルにうまく結びつけたいと思っています。そして、このような環境を提供して下さっている大学関係者の皆さまには本当に感謝しています。

鄭 実習で現場に行く前と行った後では、物事を見る目が大分変わったたり、いろいろと考えるようになりますよね。

武田 一八〇度変わりましたね。その後に二期生の紺屋が来て、一緒にいろいろな実習にも行きましたけれども、彼女は彼女なりの考え方があって、それを共有できることもすごく強みになりました。今年からは、三期生として坂本が来ましたけれども、連携研究員が三人になったことで、何か一緒になってカタチにすることができればと思っています。一人、二人だと、自分たちが思ったことを組織に上げててもなかなか形になりにくいですが、三人で物事を共有しながら、さらに他の職員にも声を掛け、共感していただくことで、今後のことを組織に投げ込んでいくことができると思っています。

鄭 八女や対馬、韓国と一緒に実習に行きましたが、それぞれの実習現場で感じたこと、おもしろかったことや、自分の想像と全く違ったことなどはありましたか？
武田 たくさんありました。八女では、地域おこし協力隊の方々との交流がありました。地域おこし協力隊と

いうのも、それまではもちろん知りませんでしたし。

鄭 何をおこすのかという(笑)。

武田 そうそう。その地域おこし協力隊の方と地元の人たちが一緒にやっている取り組みがすごく斬新で、私たちが金融機関として、地域おこし協力隊の方をどう支えていくのかということも考えたこともありました。八女で一番印象的だったのは、地元の方が参加する「旅する茶のくに・八女」という体験型観光プログラムの取り組みです。これは、今後ろうきんの取り組みに少し活かせないかと考えているところです。

また、韓国は協同組合による取り組みがすごかったですね。

鄭 一種のブームでもあるんですけどね。

武田 もちろん、国からの補助金ということもありますけれども、韓国の協同組合のように一緒に何かをやるという取り組みは、私たち労働金庫の理念や取り組みと共通するところがあるんです。日本にもNPOやワーカーズコレクティブなどがありますが、協同組合という組織は、韓国では相当メジャーというか、日本でそうい

うものが活性化すれば、労働金庫の役割も大きくなるのではないかと感じました。

鄭 対馬にも何度か一緒に行きましたよね。

武田 対馬は、韓国人の観光客がすごいですよ。韓国人観光客を受け入れる体制などいろいろ課題も学びました。それから、島外から対馬に移住して来られた方を中心に取り組んでいるNPO法人対馬次世代協議会などがありますよね。そういうところに対して、私どもも助成金等を通してかわりを持ちつつありますので、そのような一つ一つの出会いが少なからず労働金庫と何かマッチングできて、今後またそれを継続していければと思います。

鄭 武田さんが敷いてくれたレールに乗った紺屋さんはいかがでしょう？

紺屋 同じ地域に同じ話を聞きに入っただけなのに、学生の皆さんや先生方の幅広い視点から、たくさん質問や意見が出てくることに驚きましたし、とても勉強になりました。ろうきんという企業として、組織として、様々な視点から物事を考えないと新しい事業は生れないので

はないかと感じました。

鄭 一緒に奄美大島へ調査に行きましたね。

紺屋 以前、一年半も奄美大島で勤務していたのにもかかわらず、知らないことばかり気づかされました(笑)。ろうきんを利用いただいているお客様は「地域」で暮らしており、「地域」で働いているんだ、という視点が足りなかったからだと改めて思いました。

鄭 実際に実習に参加された現場で、おもしろかったことや発見したことはありませんか？

紺屋 とくに離島である対馬は、一年半勤めていた奄美大島と同じ背景があったりしておもしろかったですし、地域の方々と、地域づくりを支援する中間支援組織と行政とが、どう連携し、地域づくりに取り組んでいるかというのを見させていただきました。一体感があるところが成功しているというか、地域が活性化しているのではないかと思います。

鄭 坂本さんは、これから問題解決セミナーもありますし、現場に入って地域の方々と接する機会もこれから多いと思いますが、期待していることや、こういうこと

を学びたいということがあれば教えてください。

坂本 私自身、いろいろなことを思いつくのが好きなほうで、まずは、自分たちの職場の中ではできないようなことをやったり、いろいろな方に触れることで発見できることがあるのではないかと期待しています。その次は検証で、自分たちが思いついたことが皆さんに共感されるものなのかどうか、地域で実際に生活されていらっしゃる方たちの話を聞いたり、その場に行くことで検証できるのではないかと考えています。

鄭 統治モジュールは聞き取りをしつこくやりますが(笑)、それも検証の一つの手法ではないかと思えます。ただ、同じ話を聞く中でも、地域の方それぞれの立場によって全部違ったりするので、聞き取る方々のバックグラウンドを踏まえながら聞くと、違いの背景や理由が分かっただけのおもしろいですよ。

坂本 地域も人も個性があると思うので、その個性ごとに考えないといけないところもあるし、個性の中に共通点を見出して、その共通点に対して何かできることがないかということから、企業としてビジネスを考えるこ

とも大事だろうと思います。

金融ビジネスの世界から見た地域の持続可能性

鄭 統治モジュールは、持続可能な地域社会の構築という大きなテーマで実習やセミナーをやっています。持続可能性というのはすごく漠然としていて、難しいのですが、九州ろうきんという立場、または金融ビジネスの観点からみて、地域の持続可能性についてどう思いますか？

坂本 地域が持続できるのかということ言うと、持続できると考えています。そのために、金融業界として、できること、もつと果たせる役割があるだろうと。逆に言うと、私たち金融業界は、地域というフィールドでなりわいを成り立たせていて、地域が消滅したり活性化されない、自分たちのフィールドが失われることになるので、本当はもつといろいろなことをしないとイケないんだと思います。

鄭 一般の銀行と違って、助け合いという協同の原理

から、地域の中でいろいろな人と助け合う金融機関としてのろうきんの役割を踏まえると、地域の持続可能性に対して何ができそうですか？

坂本 一般的な金融機関としての地域での役割は、どちらかというと産業への支援が主体になります。例えば、農業への支援、工業への支援、観光産業への支援など、いろいろな産業や組織を支援することで地域を盛り上げて、雇用を創出したりするのが、いわゆる金融の役割になります。

ろうきんも同様に、金融で地域を活性化しようという側面はありますが、どちらかというと、産業や組織というよりも、一人一人の個人を支援することで、そこから地域を活性化していこうと。直接支援するのは一人だけだけでも、そのような人が集まって、ネットワークができて、そこで組織や活動が生まれるという意味では、協同という理念と合致しますので、ろうきんとしてももつと支援できる場所がある。その支援にどういう形があるのかを、実習やセミナーで考えていければと思っています。

鄭 それは例えば、金銭的な面も含めてですよ。

武田 そういうことです。まさしく、地域のNPO法人などがうまく当てはまる例だと思います。地域おこし協力隊の任期終了後にその地域に残りたい方々は何かしらの職を見つけなければならなくて、その一つの方法として地域にNPO法人を立ち上げることが多いという印象があります。そういうところに労働金庫としてファイナンスという金融的な支援と、もう少し実務的なコンサルティングのような支援ができないかということを考えています。

鄭 どういう個人や組織を支援するのかを検討するのはすごく難しいと思うんです。その人たちにどのぐらいのポテンシャルがあるのか、また、支援することによってろうきんにどのようなメリットがあるのかなどを考えなければいけないですよ。具体的にNPO助成制度などがありますが、その選定基準はどうなっているのでしょうか。

武田 県などの自治体が行う通常の助成制度は、すごく厳しいんです。仕切りがあつて、基準が厳しくて、新

しく始めようとする団体の方々は、パソコンやコピー機などの事務機器や人件費を必要としているところが多いですが、そういうものは基本的に助成されないことが多いです。

それに対して、労働金庫の助成金は間口が広くて、法人格を持たない団体などの小規模なグループでも対象になりますし、使い道に制限がありません。地域課題を解決する取り組みであれば、資金使途を問わずに使ってくださいというスタンスなので、そういう点では、助成団体からは一定程度の評価をいただいていると思います。新しいことをやろうとしている小さい団体は、どうしても資金面で苦労されているので。

鄭 それは、地域のNPOや起業を考えている方々には、とてもありがたい助成金ですね。

武田 ただし、何でもかんでもお金を出すわけではなくて、助成した後に、その取り組みにどうコミットするか、また、お金だけではなくて、継続的に何らかのかわりをつくっていくことが、これから私たちがやるべきことだと考えています。

座談会「金融ビジネスから見た地域の持続可能性」



撮影 花松 泰倫

鄭 ろうきんと支援先との関係ですね。

武田 そうですね。また労働組合や組合員という、私たちの会員さんなどのネットワークをつくるのか、そういう協同を目指していきたいですね。

鄭 事業費を与えるだけでなく、支援する組織や個人の持続可能性もサポートしていくということですが、難しそうですね。とても大きな話だと思います。

坂本 我々のほうでは、出資していただいている、預金を預けている方の共感を得られるような活動に対して資金を融通するというのが協同の考え方なので、その取り組みが私たちの組織に共感が得られるビジネスなのかどうか重要です。利益のことも考えなければいけないけれども、むしろ大事なのは、その共感の部分ではないかと思えます。

鄭 利益というよりも、価値や理念を理解してもらおうという意味では、韓国の協同組合と少し似ています。

武田 また、支援を受ける側にも、ろうきんさんから手を差し伸べていただいたということで、良い評価が波及します。ろうきんさんにいろいろしてもらったという

ことで、まず、ろうきんがどういう金融機関なのかに興味を持ってもらえますし、その上で、非営利でこういう取り組みをしている金融機関だということを発信してもらえば、必然的に取引が広がるかと思えます。

鄭 非営利とは言っても、持続性という意味では利益が大事ではないですか？私たちが見た現場においてもそうでしたし。

武田 まずは共感がスタートで、利益は、短期的ではなくて長期的に後からついてくるものではないかと思っています。

鄭 NPO助成の支援制度はかなり昔からやっておられるんですか。

武田 NPO助成は十三年目を迎えました。一部の県においては、九州ろうきんとして合併する前から実施しています。

鄭 結構長いですね。今まで支援してきた地域のNPOなどがあると思いますけれども、その組織の現状や持続可能性についてはどうですか。

坂本 そこがきちんと蓄積されてないから、ここに来

るところがあると思います(笑)

鄭 ここで解決できますか？(笑)

武田 しないといけないことに、ここで気づいたということもあります。お金だけ援助して、ああ、よかったですねとなっていて、継続的な取り組みをやってなかったと。今、まさに地域が注目されていて、そういう方々と、これからどう取り組んでいくか、まさに、スタートラインなんです。

鄭 統治モジュールの中でも、ただ実習に行ってきた、見てきましたというだけではなくて、いかに実践的に働きかけていくかという課題があるので、共通する部分がありそうですね。

坂本 数をこなすという言い方が適切かどうかわかりませんが、いろいろなどところに行つて、いろいろな組織の方に触れて、そういう方がいらっしやるのかを見ていくことで、金融に活かせる知見が蓄積されていくと思います。

鄭 紺屋さんは、実習で行く過疎地域やご実家もそうだと思いますが、この地域、大丈夫かなと考えるとこ

ろがあると思います。地域の持続可能性について、金融機関に勤めている立場からどのようにお考えですか。

紺屋 どの地域でも資金不足で活動がなかなか進まないというお話を必ずと言っていいほどあります。経済が回れば持続可能になるというわけではない。金融機関としてお金を出すだけではダメなのではないかと、最近強く感じています。

鄭 お金は使い方が大事ですね。

紺屋 そうですね。どう使ってもらって、どのようにお金を回していくのかなどを、金融機関としてしっかりと関与して考えなければと思います。

鄭 地域づくりに取り組んでいる地域を見ても、ただお金があつて、建物をつくって終わりではなくて、ソフト面も含めてお金の使い方についてきちんと計画を立てる段階を踏まないと、後から問題が生じているように思います。

坂本 それは私たちだけではなくて、金融業界全体に通じる点です。お金を出すことだけが金融だという時代

は、多分終わっていると思います。

鄭　でも、一般の金融機関とは違って、ろうきんはもう少し、その地域に合った使い方を促すような取り組みをなさっている気がします。

武田　助成金はそのまま使っていたら構いませんが、融資は、その後、利息をつけて返済してもらわないといけません。ですから、お金を借りる団体は、毎月の返済のために事業収益をあげる必要があります。

でも、どうやって収益を生むかという点で、地域で新しい事業を立ち上げようとしている人たち、移住してきた人たちは頭を悩ませているのではないかと感じました。ネットワークが構築されていない状況の中で、そういうところまでろうきんが踏み込んでいきたい気持ちがあります。単にお金を出すというのではなくて、ほんとうに返せるのか、返すためにはどういう事業をしたらいいのか、そういったコンサル的なところまで踏み込めるというかと考えています。

鄭　そういったコンサルティングの部分で決断科学プログラムがお手伝いすることができれば、また新たな

連携の形が出来てくると思います。

持続可能性のタイムスパンと地域の二極化の可能性

花松（オブザーバー）　先ほど、地域は持続可能であると坂本さんがおっしゃいましたが、どのぐらいのタイムスパンでの持続可能性を考えておられますか。地域は今後、随分と変わってくるだろうと思います。地方消滅論などは評価は分かれますけれども、おそらく一つだけ信憑性があるのは人口変動でしょう。よく言われますように、二〇八〇年ごろには日本の人口が半分になりますよね。生産労働人口も当然、かなり減る。要するに日本や地域全体の経済規模が縮小していくわけです。そういう中で、一体、どのようなことをする人に、金を貸して支援するのか。そういったことも含めて、地域がこれからどう変わっていくというふうに見られていますか。

武田　私の個人的な感覚だと、今は東京一極集中になっていて、子どもたちは都市部に行くとなかなか戻って来ない。今、地域を活性化させようとしている人たち

は、移住者のような気がします。都市部の若い子たちが興味を示していて、話題性もあって、大学生等が地域に就職してみようかという流れが少しずつ根づいてきているという感覚があります。そうしたときに、地域に飛び込んだとしても、地元住民とのあつれきという課題もある

るので、金融機関としては、そういう新しいことをしようという外からの住民、もちろん地域住民もそうですけれども、そういう人たちを支えるようなことを、金融面などのファイナンスでやりたいということが一つあります。それこそが共存、協同なのかなと個人的には考えています。

花松　移住者は増えますか？

武田　そこなんですよね。でも、少なくとも実習に行っただ先にはいますよね。

花松　いるかないかと言えば、いますけど（笑）、今後、どのぐらいの規模とインパクトがあるものなのかなとは思っています。

武田　地域によると思います。土地柄もありますし。

鄭　増えるだけではないとは思えないところがありますね。

武田　もしかしたら地域も二極化するかもしれない。

花松　そういうふうに見られていますか。

武田　そうですね。

花松　実は私もそう思っていて、できるところは勝手にやるし、できないところはどうしようもないかもしれない。

鄭　一方で、例えば、人口が増えるところもあれば、どんどん減って入ってこないところもあって、今後、一〇年、二〇年で地域がなくなること覚悟している住民もいます。自分たちの代で終わりを迎えるための準備をしている地域も韓国にはあって、私はあえてそこでは持続可能性を問わなくてもいいのではないかと思うこともあります。持続可能性というのは全ての地域に一律に当てはまるのではなくて、それぞれの地域の事情に合わせて形を私たちは考えないといけないと思います。



金融ビジネスの世界から見た決断とは

鄭 そういうことを踏まえて、金融機関という立場から見た場合に、地域づくり、持続可能な地域コミュニティの構築における決断とは、どのようなものだと感じますか？

武田 すごく難しい質問ですね。

紺屋 難しいですね。地域づくりは、多数決で決められるものではないと感じることも多いです。

武田 花松先生の話も聞いて、今後、地域活性化に向けての意欲がなく、持続が見込めない地域には、金融的支援は難しくなると思います。

鄭 渡すとかえってよくないかもしれない。

武田 そうなんです。やろうという人たちが集まって、盛り上げようとしている地域に関してはもちろん支援したい気持ちはありますが、例えば、実習で行った韓国の慶尚南道の烟臺島（ヨンデド）のように、莫大な費用が投じられていて、でもそれが打ち切られたら継続しないようなスタンスでは、支援は難しいと思います。

鄭 韓国の鎮安郡で先日、行政の方から少し違う観点でお話を伺ったんですけども、まちづくりの事業費を出す公募事業があっても、やる気のない地域はいくら促してもしない。そういう地域は諦めるというか、やる気が全然ないので支援しないのだと。それも行政としての一つの決断ということでしょう。なるべく全ての地域に充てるようにしているけど、しないところはいくら話してもしないので、行政としてそういう決め事をしているとのことでした。

坂本 当然、行政も強い力を持っていますが、金融機関も一つ強い力を持っているんですよ。金融は血液だと言われるように、お金の流れなんです。おそらく、その地域にお金流れなくなったら、行政があっても、その地域は機能しないはずなんです。そういう意味では、金融機関としてそういう決断をすることも、地域に与えるインパクトは大きいのではないかと思います。

花松 それまで何がしかのお金でつながっていた人が命を落とすことにつながる決断なわけですから、それは相当にシビアな決断ですね。それと、持続可能性を考

えるときに、ミクロなスケールでの持続可能性、つまり、集落レベルでどう存続するかという話と、日本全体、九州のような大きなスケールの持続可能性があつて、大きなスケールの持続可能性を考えれば考えるほど、ミクロなレベルでは、「すみません、まちをたたんでください」となるように思います。

鄭 韓国でもそういう考えがあるようです。うまく機能せず、人もいないような集落は支援を打ち切り、行政資源が他の地域に行き渡るようにしたいという考え方があるようで、日本にそういう例がありますかと聞かれたことがあります。一つの考え方もありません。

武田 住民が一人でもいたら自治体はなくなるかもしれませんね。

花松 強制移住は憲法上の問題が生じます。強制移住促進を行政措置としてできない場合は、坂本さんがおっしゃったように、ここで事業をやるなら金は貸せないけど、あつちでやるなら貸すよという、インセンティブを与えるような機能を金融機関は担えるかもしれませんね。

紺屋 寂しいですけど・・・。

鄭 助け合いや協同の精神と、お金を渡すかどうかの決断とのギャップが大きくて難しいですね。果たして理念だけで動くのか・・・。

武田 それは地域実習に行つて気がついたことでもあるんですけどね。本を読むと、いいことしか書いてないものもありますが、実際に行つて課題を見て、ここは本当に継続するのかなところも実際にありました。言葉には出せませんが・・・。

鄭 ありますよね。いろいろ失敗例を見られたのもすごくよかったですね。

武田 そうです。すごく大きいです。そういうところまで考えられるようになったというのはあると思います。だからこそ、逆に悩ましいところもあります。

さらなる実践的な連携事業をめざして

鄭 皆さんが統治モジュールの実習やセミナーに参加してくださっているなかで、実習現場でこういうところ

をもつと見たいなど、皆さんから積極的にリクエストがあるとうれしいのですが、期待されることや要望などがあれば教えてください。

坂本 私はまだ参加したことがありませんが、先日初めて、対馬と韓国の報告会に参加していろいろ思ったのが、トップの方の意見とそのほかの人の意見が同じとは限らないということです。ですので、地域でお話を聞く際にも、トップの方だけに話を聞くのではなくて、その周りで働いている人がほんとうにどう思っているのかも一緒に聞いてみたいと思います。

鄭 キーパーソンの方からのお話と、その回りで関わっている人たちの話が食い違ふことは、よくあります。

武田 地域づくりにかかわる取り組みをされる方は、一緒にやるうとして人たちのなかで、共通認識を持つてもらいたいということがあります。考えにずれがあると、そこで進まなかったりするのです。そういうところに我々がコミットして、決断科学と一緒にヒアリングやアンケートをしながら、一体感のある取り組みにいくことができないかと。中から変えていこうという。

鄭 学生からそういった調査をしたいという希望もありましたので、ぜひ皆さんにもご協力いただいで、一緒に調査に行けたらと思います。

武田 あと、連携研究員が三名になりましたので、統治モジュールと一緒に何かが形をつくりたいという気持ちがあります。

花松 実証研究みたいなことですね。

紺屋 そうですね。地域実習を通して、様々な知見を活用させていただきながら、何か一つ実践を、と。

鄭 私たちも、活動の中で蓄積されたものを生かせるような仕組みを実践しなければいけない段階になっているのではないかと思っています。

武田 そこで何か金融機関としてかわれることがあれば、もちろんそこに参加させてもらいたいと思います。

花松 教員も学生も、その点は共有していて、積極的に地域に働きかけて実践して、それを検証するところまで踏み込んだ上でないと、しっかりした結果は出ないのではないかと。そこをまとめなければならぬという段階にきています。ただ、そういったことを実際に地域でやっ

ていくためには、時間や経験、人員が必要だし、場合に
よってはお金も必要です。

武田 そういふ部分でなにかお手伝いしながら、一緒
に形を作っていくたいですね。私たち三人だけでなく、
共有認識を持っていただくためにも、当庫職員に周知し、
呼び掛けたいと思います。

花松 ぜひやりたいですね。

鄭 産学連携とよく聞くけれども、これまであまり考
えて来なかった意味や意義を少し考えられる時間になっ
たのではないかと思います。産学については、今まで経
済活動に重要な役割を果たすような「産」だけを考えて

いたんですけれども、ろうきんさんはそういう一般の
「産」とまた違って、理念と価値がきちんとあって、そ
れプラス、金融機関として支える役割を持っていること
をすごく理解できました。我々も大学という「学」の中
で、アカデミックセクターとして、それぞれ違う役割と
使命があることを強く感じました。

今後、互いの役割や強みを理解して、尊重しながら
補い合える産学連携のあり方、一つのモデルをこちらで
構築していけたらいいなと思います。本日はどうもあり
がとうございました。

対馬実習で統治学生と万松院に上る武田恵介氏（一番左）

撮影 花松、泰倫